

学会発表

農薬等のポジティブリスト化に伴う検査の精度管理 に関する研究（第3報）

村田 弘^{*1} 織田 肇^{*1} 岩上正藏^{*1} 田中之雄^{*1}
尾花裕孝^{*1} 住本建夫^{*1} 高取 聡^{*1} 北川陽子^{*1}
柿本幸子^{*1} 岡本 葉^{*1} 土田由里子^{*2} 上野英二^{*3}
田中敏嗣^{*4} 宇野正清^{*5} 木野善夫^{*6} 佐々木珠生^{*7}
堤 泰造^{*8} 花田喜文^{*9}

第45回全国衛生化学技術協議会

2008. 11. 13～14 佐賀市

9 地方衛生研究所のポジティブリスト制度における一律基準値(10ppb)付近の農薬検査精度の確認ならびに外部精度管理調査を実施した。

精度管理の結果は良好であり、10ppb 付近でも良好な結果が得られることがわかった。

参加協力機関の測定感度、添加回収率等の技術情報を相互の公開した結果、ポジティブリスト制度における一律基準値を考慮した農薬検査の拡大、検査精度に役立つ知見が得られた。

- *1：大阪府立公衆衛生研究所
- *2：新潟県保健環境科学研究所
- *3：愛知県衛生研究所
- *4：神戸市環境保健研究所
- *5：奈良県保健環境研究センター
- *6：和歌山市衛生研究所
- *7：広島市衛生研究所
- *8：徳島県保健環境センター
- *9：北九州市環境科学研究所

接触者健診における判定保留時の 陰性コントロール値の検討

末永朱美 国寄勝也^{*} 毛利好江 石村勝之
第5回結核診断技術研究会

2008. 4. 23 東京都

平成19年4月から結核患者の接触者に対して当所で行ったQFT検査について、判定結果と陰性コントロール値の相関について検討した。その結果、現在陰性コントロール値に対する有効基準や正常値などは示されていないが、その基準は検討すべきであると考えられた。

*：現 環境局環境保全課

QFT検査における陰性コントロール値の検討

末永朱美 国寄勝也^{*} 毛利好江 石村勝之

第54回中国地区公衆衛生学会

2008. 8. 28 広島市

当所で行ったQFT検査について、判定結果とNi1値(陰性値)の相関について検討した。Ni1値を平均以上と以下の群に分け、それぞれについて陽性率、判定保留率を全体の群と比較した。その結果Ni1値が平均以上の値では判定保留率が有意に上昇した。

*：現 環境局環境保全課

2006年～2008年に広島市で流行している

Norovirus G2/4の分子疫学について

阿部勝彦 山本美和子 国井悦子 国寄勝也^{*1}

伊藤文明 池田義文 笠間良雄 野田 衛^{*2}

第29回日本食品微生物学会学術総会

2008. 11. 12～13 広島市

広島市生活衛生関係業績発表会

2009. 3 広島市

2006年5月～2008年4月に検出されたNVのORF2 上流の保存領域G2-SKF/G2-SKR (282bp) ではほぼ同一のG2/4が検出され、アミノ酸配列は100%同一であった。より詳細に解析する目的で、ORF2のP2ドメイン領域(可変領域) G2-5a/G2-2Ra (571bp) の遺伝子解析を行ったところ、可変領域では異なるアミノ酸配列、塩基配列をもつことが分かった。さらに、アミノ酸配列で14のサブタイプに分けることができ、発生時期により別のサブタイプに変わっていき、同じサブタイプが再び現れることは1つのサブタイプを除いてはなかった。G2/4が事例の大半を占める事態が続いている現在は、保存領域と共に可変領域を解析する必要性があることが明らかとなった。

*1：現 環境局環境保全課

*2：国立医薬品食品衛生研究所

表面汚染が推定される食品からのノロウイルス 検出法に関する検討

野田 衛^{*1} 伊藤文明 阿部勝彦 武田直和^{*2}
第 29 回日本食品微生物学会学術総会

2008. 11. 12～13 広島市

食品からのノロウイルスの回収法について検討のため、NV(GII4)を赤身ブロックに接種し、各種の緩衝液について回収率を比較した。

溶液への回収率が最も高かったのは、SDS-TG、次いで 0.1%SDS in PBS で、ほぼ 100%のウイルスが回収された。それらの溶液へのウイルスの溶出は、経時的に増加した。

回収に適した溶液は食品の種類により異なったが、SDS-TGが最も安定した回収率を示した

*1:国立医薬品食品衛生研究所

*2:国立感染症研究所

広島市域におけるヒトメタニューモウイルスの 発生動向

伊藤文明 山本美和子 阿部勝彦
国寄勝也^{*1} 笠間良雄 野田 衛^{*2}

第 78 回日本感染症学会西日本地方会学術集会

2008. 12. 5～6 広島市

hMPV 遺伝子は、2006 年は 392 検体中 41 検体 (11%)、2007 年は 319 検体中 24 検体 (7.5%) から検出された。2006 年は 3 月をピークとして、1 月から 8 月まで検出された。2007 年は 2 月から 12 月までほぼ通年検出された。2008 年は 3 月が多く検出されている。3 年間を通じて見ると、2 月から 6 月に多く検出される傾向にあった。

臨床症状は発熱が最も多く (98%)、平均体温は 39.3℃と高熱であった。次に肺炎等の下気道炎症症状 (77%)、咽頭炎等の上気道炎症症状 (32%) で、その他の症状 (24%) は筋肉痛、意識障害、吐き気等であった。主要な臨床症状は高熱と下気道炎であった。

*1:現 環境局環境保全課

*2:国立医薬品食品衛生研究所

広島市域におけるヒトメタニューモウイルスの 発生動向

山本美和子 伊藤文明 阿部勝彦
国寄勝也^{*} 池田義文 笠間良雄

中国地区公衆衛生学会

2008. 8. 27～28 広島市

2006 年 1 月から 2008 年 4 月までに広島市感染症発生動向調査事業により採取された呼吸器感染症患者の検体から検出したメタニューモウイルスは、2006 年 392 検体中 41 検体、2007 年 319 検体中 24 検体、2008 年 (4 月まで) 117 検体中 19 検体であった。2 月から 4 月に多く検出される傾向にあり、主な臨床症状は発熱で、平均最高体温は 39.3℃であった。その他、肺炎等の下気道炎症症状や、咽頭炎等の上気道炎症症状も見られた。

*: 現 環境局環境保全課

ヒトアデノウイルス 3 型分離株の制限酵素切断解析 結果

池田義文 島本啄士^{*1} 国井悦子
山本美和子 阿部勝彦 野田 衛^{*2}

日本獣医公衆衛生学会 (中国)

2008. 10. 11～12 米子市

1982 年 4 月から 2004 年 12 月までの 22 年 9 ヶ月間に、15 種類、2,115 株のヒトアデノウイルス (Ad) が分離・同定された。このうち Ad3 型は 763 株 (36.1%) で最も多かった。Ad3 型の臨床診断名別分離株数は咽頭結膜熱 230 株、流行性角結膜炎 89 株の順に多かった。制限酵素別の泳動パターンは、*Bam*HI、*Bcl*II、*Bgl*II および *Hind*III で 1 種類、*Sal*I、*Sma*I および *Xho*I で 2 種類に分けられた。標準株と同じパターンを示したのは *Hind*III が全株、*Sal*I が 56 株中 3 株で、その他の株は全て標準株とは異なり、*Xho*I では 1 株が新しいパターンであった。7 種類の制限酵素の泳動パターンから 56 株中 47 株は Ad3a 型に、5 株は Ad3a2 型に、3 株は Ad3a3 型に、*Xho*I で新しいパターンを示した 1 株は Ad3a 型に属する新しい遺伝子型に分類された。

*1: 現 水道局施設部水質管理課

*2: 国立医薬品食品衛生研究所